

能楽雑感（118）～観能の効用

2019年04月01日

「平成」の世の最後の日、坂口貴信師の能、「求塚」を鑑賞しました。この能を観るのは、これで2回目ですが、大変、勉強になりました。

私は、かつて舞囃子で「求塚」を舞ったことがあります。（昭和60年、観世能楽堂において、観世元正の地頭で）

しかし、その時点では、能の「求塚」を鑑賞したことが無かったので、師匠の指導のままに舞ったつもりでしたが、今思うと、この曲のことを何も分かっていない、実に幼稚な舞台姿であったと恥ずかしく思っています。

今日の能を観ながら、改めてその感を強くしました。

能を観ることを趣味としていながら、謡も舞も進歩しない人が結構多いようです。しかし、「逆は真」で、能を観ることなしに、謡や舞は決して上達しないのではないかと思います。

素晴らしい能を観て、そのあと、自分なりに、悩み、考え、工夫をすることが上達への近道ではなかろうかと。

能楽雑感(116)～朝長（ともなが）・横浜能楽堂での演能

2019年03月13日

去る2月16日（土）に、横浜能楽堂の企画公演による、能「朝長」を鑑賞しました。
（こはぜの吹きでも紹介しました）

「朝長」は、能で観るのは20年ぶりのことですが、謡では毎年少なくとも1回、それも2月の厳冬期に限りますが、シテや地頭を受け持つ機会を与えられています。

しかし、そのどちらの場合もこれまであまり満足したことの無い、難解な、いわば永遠の課題と言ってよい曲、中でもそのなかでの「語（かたり）」の難しいのが本曲です。それ故に、今回の観能の動機の最たるものは、前シテを担当する、梅若紀彰師による、前シテの「語」を聞いてみたかったことにありました。

特に、前シテによる「語（かたり）」を紀彰師がどの様に謡うのか、つまり、「緩急」、「強弱」、「高低」の要素を、語りの中で、どのように使い分けなさるのか、興味津々でありました。

結果、予め予想していた以上に、抑制の利いた、折り目正しい表現に感じ入りました。思うに、謡というものは、習得である程度の水準には達することが出来るかも知れないが、それ以上は、演者の人格そのものの反映であって、努力とは無関係のものではないかと思ってしまうました。身も蓋もない言い草ではありますが・・・

もう一つ、演能において、謡を引き立たせている要素として、立ち姿や居住いの美しさを無視できません。この点でも、前シテは完璧でありました。

後シテは、梅若実師。若武者ですから、黒烏帽子、朱の衣、白大口袴のいでたちは納得できましたが、房付きの朱色の杖を突きながら登場したのには驚きました。

動きもかなり大儀そうで、橋懸でも舞台でも床几に腰掛けたりしていましたが、静止画としてみると、さすが、随所ではっとするような美しさも、力強さも感じました。

地謡（地頭は観世喜正、副地頭は山崎正道）も素晴らしかった。特にクセは感動モノでした。

ある時は大きく、ときには畳み込むように、ある時は静謐に、そして一転して躍動し・・・音色も変幻自在に・・・

謡の音楽性を現代的に高めたのは実師であろうと思いますが、おそらくは、この地謡も実氏の事前の采配があったのではないかと推察しました。

今回の演能は、「無常」をテーマとしたからでしょう、中入の時間帯は、相国寺僧侶 11 人による観音懺法の儀式（3 種類の銅鑼と声明）が披露されましたが、これまた、雰囲気盛り上げるのに、素晴らしく、大きな貢献でありました。

能楽雑感～能「生贄」

2017年 02月 06日

横浜能楽堂の自主公演はいつも素晴らしいと思っていますが、一昨日（2月4日）に行われた「能の五番、朝薫の五番」はまさにその白眉と言えます。

「朝薫」は通常「玉城朝薫（たまぐすくちょうくん）」と呼ばれる17世紀の琉球王朝の王の名前で、彼は中国からの冊封使をもてなすために舞踊劇「組踊」を考案させましたが、その代表的なものが今日も、無形文化財・「朝薫五番」として引き継がれています。

「組踊」は本邦の能楽の影響を受けているところから、横浜能楽堂の企画は能とそれに対比される組踊を併せて紹介しています。

年に一度の公演で、一昨年第一回は「櫻川」（大槻文蔵）と「女物狂」の組合せ。今年は第三回目で、「生贄」と「孝行の巻」で、入場券を白謡会最長老のKさん（この公演を毎回観覧）に入手して頂いて観ることが出来ました。（残念ながら、時間の余裕がなくて組踊は拝見できず）

能「生贄」の筋書きは次の通りです。（横浜能楽堂発行のチラシによる）

「落魄の身となり都を追われた男は、妻子を伴い東国に下る途中、駿河国吉原の宿に立ち寄ります。そこには、富士の生贄神事が行なわれており、その晩に宿泊した旅人は神事に加わることを知らされます。親子は宿を抜けだしますが、連れ戻され富士の御池に連れて行かれます。御池では、氏人たちが集まり、生贄を決める籤引きが行われます。その籤に娘が当たってしまい・・・」

娘が生贄になり、船に乗せられて御池にこぎ出していく際の親子の愁嘆場があった後、悪蛇が生贄を呑みこもうとしますが、そこに、富士権現の使者である火の御子が現れ、両者の戦いが展開されます。その結果、火の御子が勝利して、生贄は無事に親子の許に戻ります。

スペクタクル劇とも言えるこの能は、江戸時代、将軍綱吉・家宣時代に13回も上演された記録がありますが、その後は人気も衰えて、上演が途絶えていましたが、今から30年前に復曲（演じたのは梅若玄祥師）されたのだとか。

観能の感想を簡単に言えば、歌舞伎や文楽に似た娯楽性の高さ～親子間の人情とか不受理と闘う正義の味方などの単純明快な面白さ～で、能と言えば幽玄ものと決め込んでいる頭に冷水をかぶせられたような思いがありました。

思うに、能楽の衰退を引き留めるためには、多くの若者たちに能の面白さ（能における演劇性の多様さを含めて）を理解してもらうことが必要で、それには「井筒」を見せるよりも「生贄」を見て貰うほうがはるかに効果的であると思いました。

その他、断片的に感じたことを列記します。

先ず、役柄と演者の関係で言えば、生贄の子役：松山絢美が大事な役割を抜群の歌唱力と演技力で見所を魅了し、生贄を決める籤引きを強要するワキの神主：殿田謙吉の冷徹な悪役ぶりが存在感を示し、父親：梅若紀章が熱演しました。

火の御子：梅若玄祥と悪蛇：梅若長左衛門の闘いの振り付けは興味深く、橋掛かりを殆ど使った「流れ足」（水の上での戦いなので）はさぞ体力を消耗されたかと。お二人ともその故もあってか、切れ味が今イチでした。

地謡：山碕正道（地頭）、馬野正基（副地頭）ほかは気合が入っていて聴きごたえがありました。

また、造り物の、生贄を乗せる船には、太い舳い綱が巻き付けられていて、ほどかれた綱を握りしめて父親が娘を引き戻そうとする形は、「俊寛」を思い起こさせました。

能楽雑感～国立能楽堂での「三人の会」

2016年 07月 06日

去る6月25日（土）、国立能楽堂で開催された首記の会は、真に意義のある会であり、且つ感動も頂戴致しました。

この会は、観世を代表する3宗家、即ち観世流家元（清和）、分家（鋳之丞）、梅若家（玄祥）の内弟子出身者を、3宗家がそれぞれ一人ずつ推挙して結成された会です。

3人の名前と演目は、川口晃平（養老）、坂口貴信（熊野）、谷本健吾（望月）でありましたが、それぞれが今から近い将来にかけて観世流を担って頂く中堅実力者です。

これまで、玄祥師と清和師の共演（通小町のシテとツレなど）は観たことがありますが、このように、3派が各宗家お歴々も含めて、舞台に集まるのは前代未聞のことかも知れません。「矢来」の喜正師も地謡に連なっていましたから、まさに汎観世の興行でした。（敬愛する馬野正基師、清水寛二師も地謡で参加）

狂言方も万作、万斎が熱演。

私が、謡を始めた昭和30年代初頭には、梅若と観世のそれぞれのアマチュア愛好家達は、結構反目し合っていましたから、隔世の感があります。やはり、能楽自体が存続の危機に瀕しているからでしょうか。

壮年が主役の会である故に、老熟能楽師の出演が見られなかった反面、次世代の有望能楽師が名前を連ねていました。

即ち、観世淳夫、鶴沢光、梅若紀章、関根祥丸など。彼らは、能楽を後世につなぐ役割の片鱗を垣間見せてくれました。

一番びっくりし、且つ嬉しかったのは、関根祥人師の遺児、関根祥丸君の出演でした。熊野の朝顔役でしたが、ちょっと見ない間にすっかり身長が伸びていて、シテの坂口師の真後ろ（花見車の中で）に立っていて、顔半分が出ていました。

私にとって、この会で最も愁眉であったのは、熊野を演じた坂口貴信師の存在でした。彼の演能を拝見したのは、多分5回目だと記憶していますが、会を追うごとに成長しています。そのベースとなっているのは、察するに「舞台人」としての覚悟でしょうか。舞は規格通りであり、几帳面で且つ端正。謡は、今までは、清和師のコピーだと思っていましたが、この会では、嫌みにならない程度の坂口節が出ていて好感度が高くなりました。

また、木目込み人形のような端正な着付けも、身体能力の高さを示していましたし、地謡と舞台で舞う時とで、半襟の色を替える（翌日の同じ国立能楽堂での鼓の会で発見）など細やか心配りを伺わせました。

最早、九州の能楽師ではなく、全国区で観世流を代表する人になりました。藍より出でて藍より青し。

芸術の世界で、ポリティカルであることとテクニカルであることはなかなか両立しないものですが、「三人の会」は、これらを、かなり高い水準でクリアしているように思われます。

今後、目が離せません。